

布流社

131 いそや神旧にし跡のしるしとて宮居久き杉の村立

132 咲花や木間を深く埋らん杉の葉葉□古のゆふして

133 檜原もる月や昔を影ならん紅葉の色もあけの玉垣

いそや神とハ岩の上と事なり

昔ある女河のはたにて布を

洗けるに一の劔川上より岩の

切下たる則此布纏てと、まる

それをもて布流トハ布をなかと」(十六・ウ)

いへり大和国なり

白山

134 幾世まで朝日の影に向らん雪のなかむるふしの白山

此権現ハあさ日に向ひてわれ

佛法守護神たるへき御誓也

135 白山ハ積れる雪のすかたにて雪の中なるこしの松風

136 峯もけに雪いた、けハあやたへし法の守のこしの白山

氣比宮

137 いつよりか浦の松風聞初めて玉垣ちかき

138 白露の玉の御垣に月さへて□に立ぬる

139 あひの風け比の波間にをとつれて□」(十七・オ)

140 御こしめの遠きふもとに跡たれて月に上なき峯の松風

あひの風とハ西北□風けひの□

海より外有へからず気の社

ハ金剛界なり巖嶋昭蔵界

なり

鹿嶋

141 色かへぬ檜原松はら霜置て神のかしま八代々の□

142 岩□ゐるうな神かたのちかけれハかしとりなきぬ

143 □ひくうなかみかたのをきつす□かしとりな

144 すかの子のおなしとおもふ□なハつけぬ影見□

鹿嶋ハ岡の□すくれて

す、しき水□かれたりかしまの

(松下人)

(遙山麓舎)

」(十七・ウ)

あやしとおもひけんきのきくひに  
あさのうミをつけたり針をしるし  
にて尋給ふに此三わ山に入尋来る  
是をもつて四月上旬卯日

祭給此明神ハ社なきなり杉  
をもつて御躰とす公家より

勅使を立て祭給ふ也此ウミヲ(十四・ウ)  
見わけあるによりて三輪の

明神と申也国津神あさ

なの明神也

土佐船遊事

118 をしなへて難波のうらにあさる子ハ今そよりそふ今そよりませ

葛城神

119 かつらきや雲間の月に夜ハ明て末も通らんくめ坂の梯

120 影うすき月ハ程なく木陰(ママ)て風トタフル花の梯

葛城の橋ハ大峯と葛城との

中に渡さんとし給ふ明神御

すかたみにく、して夜わたさん

との給ふ行者ハひる渡さんとの玉フ(十五・オ)

それによりて御中あしかり

けり公家に讒訴ありて行者

を伊豆国に移奉されハ橋の

支子文庫「神祇和歌」翻刻

中たえていたしはてす物の、  
中たえたるにハこれをよそへき

121 岩橋の夜の契もたえんへし明るわひしき葛城の神

玉津嶋

122 玉津嶋ひかりをこ、に移置てたえせん道ハ和哥の浦風

123 玉津嶋衣も月の影すきて風もたまらん袖の上露

玉津嶋ハ衣通姫の御事也

そとをり姫ハ御見め麗しく

衣を下をる御はたへなりされハ(十五・ウ)

それによりて衣とをり姫と申也

124 かさしをる吹上の菊の花さかり入江の月の影そさむけ□

125 吹上や月影白し真砂山霜にさへたる浦の松風

126 玉ひろふ和哥のうら風吹増て詞の花もゆふにつきせず

127 人間ハ見るとやいハぬ玉津嶋霞入江の春の明ほの

出雲大社

128 八雲たつはしめハ大和詞にて読けるうたの文字そ定

三十一字ハ八雲立哥より定けり

129 人をけにあわれむ神の誓にてひの川上に雲そ色付

日の川上ハ出雲国在年々人を

欠なふ是八色の雲の立ける時(十六・オ)

の蛇事なり

130 人のけにうれへを神ややめつらん深き誓ハいつもつきせし

今の権現是也けふ日記在之

那智(十二・ウ)

102 松風や霞の玉をくたくらん雲より落瀧の水上

103 糸はあれと玉ぬきとめん瀧なれやかさなる峯を落松風

104 木のもとに住ける跡を見つる哉那智の高根の花のかさして

105 御熊埜、浦の濱ゆふ幾かさね深き心を神ハ忘し

106 音なしの里も夜さむの月影にあさの衣を忍打也

107 御熊埜、雨ソウ降て木陰のつかやに立る鬼のもコクサ

108 咲花の雲の梢に瀧落て山のは高く霞松風

香椎宮

109 今屋<sup>子</sup>柵を神の智に生合て両度霞杉のむら立

110 おもふこと両度神に祈見んしるしの杉の枝をかさして

香椎ハ大井にておハします筑前

国怡土郡浮江村子貞原、(十三・オ)

(ママ此エカ)  
臨海竺に大なる二石也長さ

一尺二寸六分はかり一尺一寸をもさ

十六隻鶴の子の如し神宮

皇神<sup>后</sup>新羅国追伐の時

111 千ハや旧香椎の宮のあひ杉を両度かさす身にそ成ぬる

此御使に吉凶あり吉事を以二度も三度も

立事あり

諏訪

112 梓弓春いわふ日に祭して神の教ハ今や聞らん

正月祝日祭とて国の人集て

的を射也其時明神あそはし

置たる自筆のきくしきあり(十三・ウ)

たち聞の間とゆふハ一間作のこされたり

113 うら風も真砂のうへに吹あれて夕霧さむし住吉の松

114 これとても恋の心のあこかれて音信ハ聞夢の中にも

三輪明神

115 雪によも尋る道ハあらしとて嵐に閑杉たてる門

116 我ことく誰も檜<sup>ハラ</sup> や分つらん昔も遠く残神垣き

117 折花ハ檜原にまじるかさし哉雪踏まよふ三わの山本

三わに市あり明神伊勢国

あふきの郡大和の三室の峯

に移給ふ国津神の玉はくの

明神ハ客神也我ハ国津神

なりいかて此高き所に居給ふへき(十四・オ)

と云三室の山の峯を三度

過ぎ給へり是を三輪とハ云なり

又云或時大和ひめ事にあひ給ふに

年月を経て夜ハ来て昼ハ  
帰給ふ女年比かよひ給ふをや

傳教大師入唐の時明神

契約有て叡山の守護神に

願奉らんとありけるに 其後

弘法大師かたらひて東寺の

守護神に成給ふ也

89 おもひ草二もなくて祈見し越つる山のかひハあらハせ

90 いたつしろの岡に苜蓿萱蕙松も契を結をきけり  
(ママ)

此王子恋をして此所にハなるまし

き契松をしるしにむすひをき

給へりされハ哀なるかなや野中に

たてるむすひ松ともよめり」(十一・オ)

91 雪も先山の南に降初て岩屋のうちにさむき松風

熊埜ハ南山也それを以南とは申

なり岩屋とハ大峯しやうの岩屋也

92 露もらぬ岩屋も袖ハぬれにけりきかぬはいかにあやしからまし 西行

93 置露や春あた、かにむすふらん枝の南にいそく初花

南枝花初開とゆふ心なり

94 おもふ事なきのは誰か引落神の恵も深き御熊野

95 紫の藤しる浪しへてをとろす下ハやすむ明ほの  
本ま、

96 木の葉より猶すき船のかるけれハ岩こす浪のたよりしてゆけ

岩田川

97 浅からぬたのむ心ハ神もしれ岩たかき世をあまたわたりて

98 水分て百瀬を渡なかれ哉作りし罪も今やす、かん」(十一・ウ)

此川ハ無勢池よりなかれたりされハ

罪障消滅の名也

発心門

99 人にはなれん事も憂物を又世にかへる道忘はや

100 遁てやうかりし道を忘まし心発す門に入ぬる

101 捨身の御法の門に入ぬれハ今よりきつる墨染の袖

瀧尻より山中ハ九品の淨利也

事さら発心門よりしてハほつ

しやくわうの池也権現一度

参詣族ハ三悪道にをとさしと

云 せうこに我立へしと云誓」(十二・オ)

有證誠権現にあらわれ給ふ

王城甲寅唐の天台山わうしん

の峯に天くたり給其御躰ハ

八角の水精玉高さ三尺六寸にて

天くたりそれにて五十年経て

甲子の年伊与国石土峯に

六年経て其後淡路ゆつり

はに移給ふ又六年経て甲午

年三月十三日紀州室郡

そなへの里に跡をたれ給ふ也

住吉明神 諸神住給ふなり

75 住吉も今は日吉跡たれてあまねき法の品マツルラン

北野

76 諸人の影そとたのむ一夜松旧き匂の残るむめか香

天曆九年三月三日天満天神と

いわ、れおハします時北埜に

松千本生たり今の北埜是也

つくし飛たりし梅ハ跡也

77 別路の心つくしハ遠とも花昔の主しわするな」(九・オ)

78 雨よりも涙の数やまさるらん家を離し深き恨に

離家三四月 涙落百千川

79 うかりけり今夜の月をなかもても旧き情ハ袖の上露

去年今夜清涼殿に侍ると云心を

80 苔のむす瓦に松の風さひて涙に聞ハ只鐘のこゑ

都府楼纒看瓦色

観音寺只聴鐘聲

81 鳴神や雲のうへよりくたるらんなき名をそ、く深き涙に

有時天神鳴いかつちと成て洛中

に人を(ママ)そんな方し給ふ或時此里の

家の庭にをちさせ給ふ野相公一」(九・ウ)

字千金ハいかにと高村申させ給へハ

妻戸の内に千金をなき入させ給ふ

又申されけるハ三世契ハいかにと

申させ給ひけれハ即なりあかり

給ふ其後高村のあたり十町

より内に啼せ給ふことなし

82 なき名をハいかてか人のしつむへき神の北埜、深き誓に

稻荷

83 仏にも母とゆふなる神なれハ子の百遺にハしるしあらしよ

いなり明神ハ本地伊奘冉尊

智恵ハ諸神達(佛如来)の母也これをもつて

百けとハ云也百五十日の事也」(十・オ)

84 瀧の水かへりて澄とおもハはや神の誓になき名そ、きて

85 露かゝる稲葉に月やかさすらん鹿の音遠き小田の山下

86 瀧の水帰てすます稻荷山七日のほらハしるしと思ハん

或女房人にぬれきぬをさせられて

年月此明神に願をかけ奉間

七日参籠して祈誓申即無実

をはれて帰いなはとハ稻荷と云

心なりかさすとハ杉ををりていなりの

下向に必かさすなり

87 日吉にも住へき物を稻荷山神と昔の契ありけり

88 杉のはや手折て袖にかさすらん今日の初牛ハの二月空下」(十・ウ)

稻荷にハ杉のはをかさしにする也

瀧有鞍馬のうしろなり

61 ゆく水のなかれに勝涙かなありはてん世に思おもひハ

春日宮

62 かさしには北埜藤浪手をりても心つかひや人をみるらん

春日の社ハ藤原氏の公卿(七・オ)

の氏神なり心仕とハ臨時の

祭のとき藤をかさす也

をもしろかりしとかや

63 鳴鹿もはれゆく月にこゑ澄て紅葉ををろす峯松風

64 はるの日ハ梅の匂もやすむらん若菜つみけるかすかの、原

65 春日山雲のけしきも暮そめて三笠と申せ雨ハふりける

66 いにしへの鹿鳴ハ今の春日にて神屋ひかりをあまた分らん

67 天のはらふりさけ見れハ春日なる三笠の山に出し月影モ異

これハ安部仲丸入唐して

明州津にて読り又鹿嶋の

大明神ハ春日に渡せ給ひける

時ハ白鹿也則鹿ハ御躰也

68 見さふらへ三笠と申せ宮木の、木のした露ハ雨に増れり、

日吉

69 海のうちへに色ある雲のたなひきて波も御法のこゑそきこゆる

山王ハ吉野、座王におハしまし

て我大乘守護の志あり此所

に居と申させ給ひけれハ座王ハ

此所にてハ小乗たにも流布

しかたし大乘守護あるへからす

他所を尋させ給へと申させ給

へハ則此所を立出貞元々々

七月廿五日近江国唐崎に

して尋させ給ふに天台山の南海(八・オ)

波の音 

墨	消
---	---

(偶性)

墨	消
---	---

(如来) とゆふ又

浪の音に唱是にしたかひてゆら

れてゆき給ふほとにひゑの山

横川の杉のもとに落と、まり

給ふなり

70 なへて世の影ともたのむハ柳神の日吉のてらすひかりに

大法の 天地天皇の御に。ハ柳神在て

71 神もさそあまねき影御世を照らんかけのならふる七の玉垣

72 日のひかり木高き山のふもとにて曇ん御世ハ神そしるらん

73 なミ風御世に任する船のゆられ来て春をもしろや唐崎の松(八・ウ)

74 三ならふ社の数に手向して日吉の神屋代を照らん

日吉宮にハ 天照大神 八幡大弁

賀茂大明神御社ハ山城の国

一宮なり然に太子六角堂に

観音のくわんしやうの鎮守也

大和のかつらきの峯に移給ふ也

賀茂の御社桂河カワかも川との

あわひヲめぐりて石川の瀬下

石川の瀬々せ見の小川ト彼川より

のほりてひへの山本に住給ふ是

是田中明神六角堂同事也

41 影見ゆるせみの小川の清けれハ行てハかへる上下の道

御あれハまつりなり

42 上澄ハ下も、濁らぬミたらしの恋のやつこの行衛しらはや（五ウ）

賀茂事別日記に在之

片岡森

43 かた岡の森の木の葉も色つきぬ早田のをしね今やかるらん

44 片岡の木陰すくるミたらしの川音す、し夕闇の空

45 色かはる小田の稲はに鴉鳴て森のしつくも深きよの月

46 かた岡の木の下影に月すみて涼き音ハ賀茂の川なミ

47 月も尚神の宮居に影すみて花とな見えそ竹の葉の水

齋宮

48 みね越てかよふ心の深けれハ是そ手向の大和ことのは

49 偽ヒのた、すの宮の前にして空鳴しつる時鳥哉

50 雪降にせみの小川を見わたせはた、すの竹ハ下をれにけり

御手水（六・オ）

51 恋せしとおもふによらぬ心哉木の下清き森の月影

52 称宜事を神もうけすハいか、せん法の台をさそふ川なミ

53 称宜事をさのミ聞つる社こそはてハなけきの森と成ぬれ

貴船 賀茂の末社也

54 誰ゆへにあこかれそめし心そと神も昔や恋しかるらん

此明神因位の時恋をして

この所をちと、まり給へり

55 瀧津瀬にとらぬ神の涙哉木の下露も玉とちるなり

56 分来つる山より深きうらみ哉神も昔や物おもひけん

57 もゆる名ハ身のたく火なる笠木のほくらき時の夕なるらん

和泉式部保正にすさめられて

彼の貴船に参籠して云

58 物おもへハ澤のほたるも我身よりあこかれ出る玉かとそ見る（六・ウ）

59 奥山にたきりてをつる瀧津瀬に玉ちるはかり物なおもひそ

明神御返哥かくそありける

60 幾代かわ浪にしほれて貴船河袖に玉ちる物おもふらん

いくとおもひかへして女もとのことく

なるされハ男女の事此明神

に祈誠申にせうりなしと云

事なし貴船川のなかれに

## 鏡宮

21 くもりなき鏡の宮のちかひにて月もはれたる伊勢神風  
宇佐宮

22 霜雪のふるの社の数くくに心つくしに身をハなけかし

23 あきらけき神も井垣かおもふらんかりの此世ハさもあらハ□れ

孝謙天皇位を道鏡禪師に

ゆつり給ふへきよし和氣の清丸

を御使にて宇佐宮に勅使を立(三・ウ)

申されけり八幡大井ハ我もの

いへはこそかゝる憂きことをきけとて

其時物を仰らる事を御留有

位の事をハ御返事ありて定

めさせ給ふなり薦枕の事

宇佐の宮御祭之時出させ給ふ

なり祭多のせと号する所野

の中に川のあるに鳥居立て

くきぬきしめくらし近辺の不浄

をきよめて三年六年に三たひ

いておハします薦のやうにした

御躰にもちひ奉宇佐宮昔かり

そめに薦枕してと、まりおハします也(四・オ)

24 薦枕かり寐の旅とあかさはや入江のあしの一夜ハかりに

## 男山

25 老にけり身そふ鳩の杖なれハ向の里も霞明ほの

26 事問ん昔をしるや岩根松名ハ旧ぬるに尚も可(在カ)

27 男山老て坂ゆく契あらはつくへき杖も神ぞしるへき

28 八幡山神やつきけめ鳩の杖老てさかゆく道のためとて

29 八幡山向への里のほとゝきすおもひしかたのこゑもかはらん

30 数ならぬ我身ハ旧ぬ男山老せん神も哀かけなぬ

清水寺

31 石清水きよき八月のひかりにてすゝしき影ハ松風のこゑ

32 数ならぬ松さへ花や霞らん分て願をかくる遠水

33 男山<sup>マコ</sup>の桜を諸人のかさしの花に手をりてぞ見る(四・ウ)

34 朝開桜山吹かさしつゝかえるみつ野、山あひの袖

八幡の臨時の祭ハ三月三日也其時

勅使立てかさしに桜山吹をさす

みつ埜とハ淀にある美豆野也

賀茂宮

35 ゆふたすき願をかけて年もへぬミたらし近きあけの玉垣

36 水垣のひさしくたのむ心しれ神に心をかくるゆふして

37 岩越る御手洗川の水かさ<sup>も</sup>に跡たれて底の清ぬ浪の上の月

38 かけてけり今日宮人のもろかつら神の御あれの中<sup>ヒ</sup>の酉日

39 神もけに此川の瀬に跡たれておもふぞ遠しかつら木の峯

40 影見ゆる月のひかりの清けれハ二の河の三ツのをち(五・オ)



洗川のなかれなり外宮ハ山田はら

(本地 宮川 れり) 墨消 (一・ウ)

10 鳴すともこゝをせにせん郭公山田のはらの杉のむら立

此哥ハ西行参宮之時読る也

11 月かけを旅寐の袖にかたしきて萩のは渡伊勢のはま風

12 神風や伊勢のはま萩折しきて旅寐やしなぬ荒きはまへに  
(ママ)

13 穂に出る山田はらに鴈鳴てゆふ霧わたる宮川の浪

垂仁天王御宇廿五年三月一日天照大神

豊すき姫ヲしつめまさんとを尋ね

給ひてとたのしのはたに詣てつゝ近

江国につとらめくりて美濃伊勢国

にいたる時天照太神せなミ帰国也

彼国あわれむへき国なり此国に居ン

とおもふ太神のをしへの佩に其後

伊勢国に立寄給ひて神宮を」(二・オ)

五十鈴の上にはます是をいすゝと申ハ

ひるめの神

14 影清き日のくま川のなかれ哉岡辺のさゝに駒遊也

日のくま川別の日記に在之同

(ママ) 水の碓を別にあり

月よみの宮

15 天の戸の明け八月もなかりけり上見ぬ鷲の山のはの月

(尺迦如来なり) 月よみの宮ハ本地に、きの尊

(靈鷲山) 御法を説給ひし事を) 墨消 (ぬ鷲 いへり)

墨消

桜宮

16 よも散らし神の井垣の花なれハ桜の宮の春の明ほの」(二・ウ)

17 神風ハ吹けともちらさねハ桜の宮ハはるに限らず

風宮

18 ちらぬ間もあたにや花をおもふらん桜をさそふ風の宮とて

天照太神伊勢の国わたらひの郡

鈴鹿の宮におはしまして四百八十

四年也雄略天皇の御時周穆王

五十三年御入滅

朝熊宮

19 澄月の鏡に似たる影なれハ神の心ハいつもくもらす

20 くもらしなあまてる神のます鏡磯辺の浪にやとる月影

朝熊河ハ海のはた岩の中しほ風か

吹て彼神鏡をあらへともくもらせ

給ふ事なしかし面八寸なり是ハ」(三・オ)

内子所の一也我朝に三鏡在之

一にハ紀国日の前羅王におはします

(ママ) これ一也大神宮の一のきて大連

内子所ふるの宮日前三鏡座

多々みうけられる珍らしいものである。紙副の関係で、これらの出典についての考察は稿を改めることとする。

本書の翻刻をお許し下さった九州大学図書館の御厚志に対して深く感謝申し上げます。

### 翻刻

#### 凡例

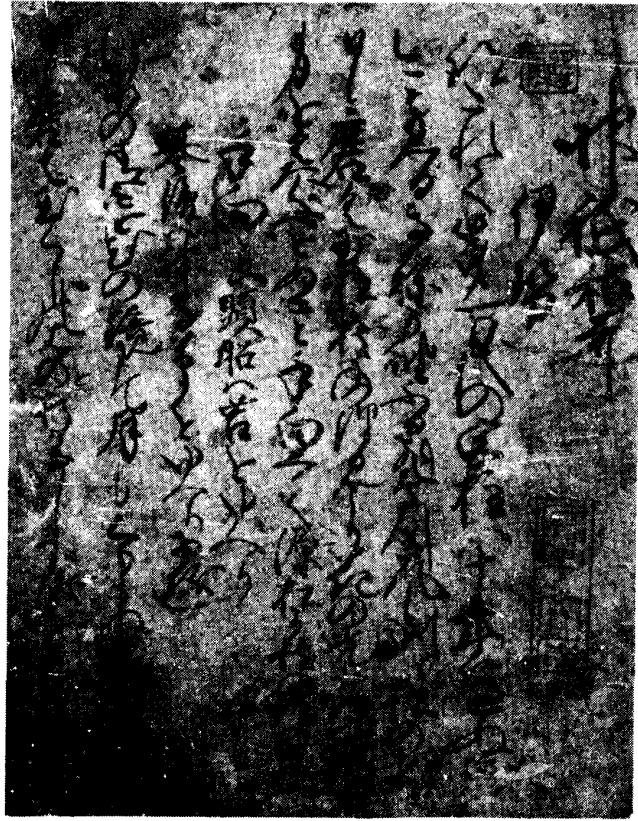
- 1 原本の姿をなるべく保存するため、漢字仮名の別や仮名・送仮名など、すべて原本通りとした。
- 2 漢字の字体は、できるだけ原本のままとしたが印刷上の都合で通行字体に改めたものがある。
- 3 改行は原文のままとした。
- 4 丁付は、ㄥ(一・オ)、ㄣ(五・ウ)の如く記した。
- 5 傍注・校異は原本のまま記した。
- 6 判読不可能なものは□で示した。また本文に疑問のある箇所には(ママ)と注記した。
- 7 墨消部分・重ね書部分の判読可能なもの文字は( )の中に傍書した。
- 8 研究の便をはかって和歌に通し番号を付し、配列順序を示した。
- 9 巻頭・巻末の印記は、( )内に示した。

(本文)

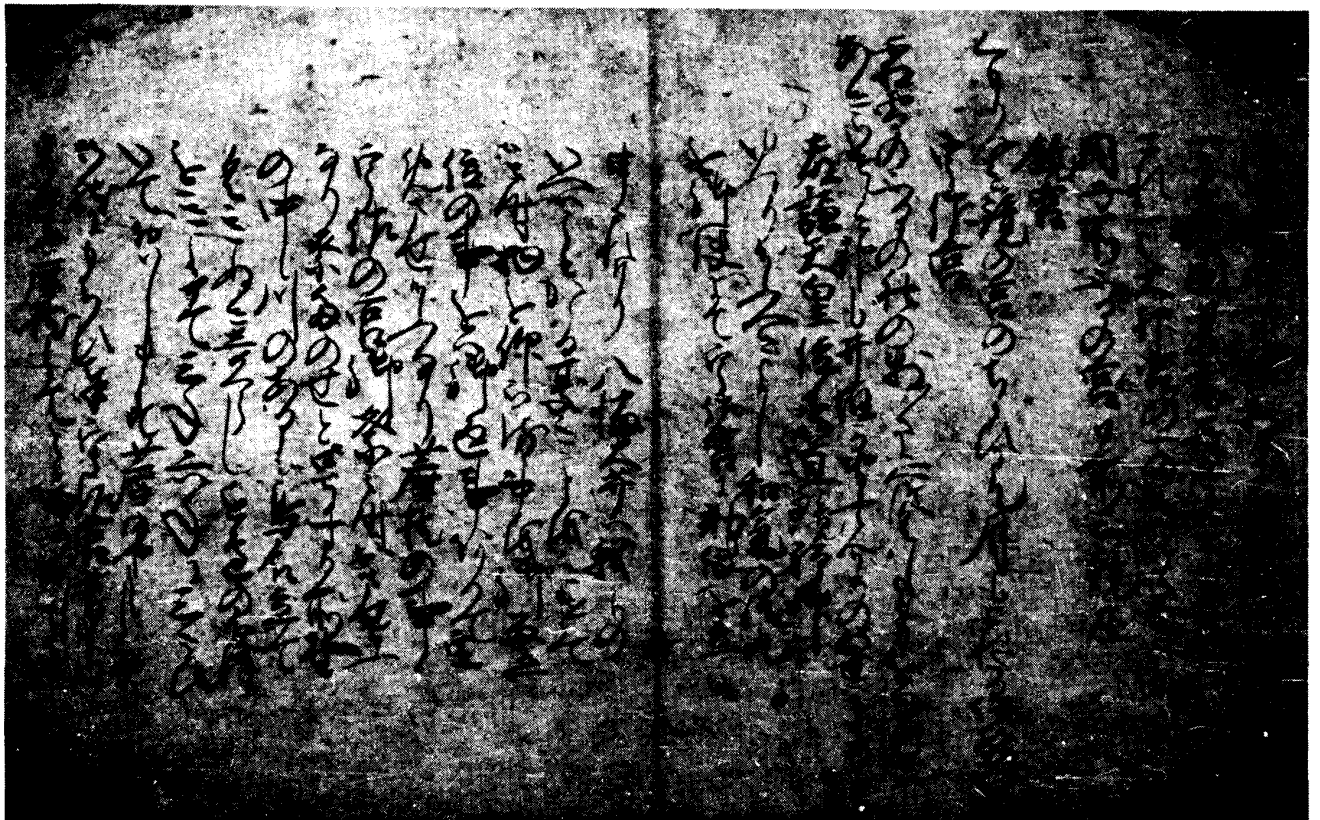
神 祇 和 哥

(遙山房) 伊勢 (支子文庫)

- 1 跡たれて幾万代の宮柱八十年ハ過ぬ□なミ
- 2 今そ見るきねか袖ふる飛鳥川嵐に馴、松の下□
- 3 日に磨く玉松か枝の深みとり花の光も深神垣
- 4 身をくたく心をぬさと手向して源松か枝の浪の白ゆふ  
手向とハ頭昭ハ苔をゆへり  
基俊ハ神馬草をゆへり両儀也
- 5 川水の清きを花の鏡にて月もくもらぬ宮川の浪
- 6 日に磨く玉くしのはの折かさしつくはねの□(破損)  
ㄣ(一・オ)
- 7 枝ことに置そふ霜の八重榊手向の数の千きのかたそき  
八重榊とハ祭のとき井垣に八重<sup>本</sup>  
卷たる榊なり俊成ハ只しけきを  
いへり物しけきをハ八重霞八重  
霧雲の八重たつ八重款冬といへり
- 8 神風や久きあとをしめ置てよするを聞ハ敷浪の音
- 9 咲花のしらゆふかくる神路山見はやいせをの宮の月影  
大神宮を内外と申事内宮ハ是<sup>(御裳)</sup>  
神路山なり本地伊奘諾尊



(一・オ 冒頭)



(四・オ)

(三・ウ)

とあり、次の「三輪明神」に入る。これをすべて諏訪神社にかゝる文章と見られるか否かの問題であるが、後の「住吉の松」をふくむ二首を諏訪神社の歌とするには不自然な感があり、唐突に出て来る十四丁オモテ初めの「たち聞の間」云々の言葉の説明も、本来前文にあった言葉の説明でなければならぬだろう。また、残存部が少ないので決定的なことはいいかねるが、「住吉の松」の歌語からしても、恐らく「住吉神社」にまつわる歌と考えるのが妥当と思われる。「諏訪」神社を記した十三丁ウラは、二くくり目の最後の丁にあたっているの、おそらくは三くくり目に入った最初の一丁ないしは二丁が脱落したものではないかと考えられる。因みに、現存の形態は、一くくり目三枚（第一丁が破り去られているが）、二くくり目四枚、三くくり目二枚で、改装のあととはみられない。前述の現存最後の丁である十七丁ウラが、「鹿嶋」の記事の途中でできているのも、その後が続く部分がこの落丁によって失われたためと考えられる。

以上の考察から落丁を想定すれば、現在の十二丁ウラから十四丁オモテへかけての記事は、「諏訪」「住吉」「三輪明神」の順に記されていた名残とみられる可能性が大きいのではないかと思われる。

歌には同筆で校異が記され、「本ママ」などの傍記もある。また一行ないし二行にわたる墨消部分・重ね書き部分が数箇所あり、消されたところはいずれも本地垂迹説にかかわる言葉の記されたところである。たとえば「本地『尺迦如来ナリ』」の上に『に、ぎの尊』と重ね書くこときて、これは別筆である。摩れた墨の上をなぞった形跡もみられるなどもあり、後

人の所為によるものと考えられる。なお、年代を経ているために料紙が褐色化している上に摩れがひどく墨の消えたところもあり判読不可能な部分がある。

巻頭上部に「遙山房」、下部に「支子文庫」、最後十七丁ウラ左上部に「松下人」、左下部に「遙山麓舎」の田村先生所蔵印が押されている。

内題の「神祇和歌」は巻頭に位置しているが、第一くくり三枚中の第一丁目が破れ失われているので、果たしてこれが原本の巻頭であるか否か、正確にはわかりにくい。あるいは纂題和歌のようなものの一部を写したのかとの疑いも持たれるのであるが、勅撰集・私撰集などの部立が「神祇歌」または「神祇」と表記されるのが普通であるのに比し、巻序もなく「神祇和歌」との改った標出のしかたから察するに、単なる部立ではなさそうに思われる。従ってやはり、破れ失われた第一丁は表紙かあるいは扉ではなかったかと考えたい。

『国書総目録』によるかぎりでは、天理図書館に『神祇和歌集成』が一書みられるのみで『神祇和歌』なる書名は他に見あたらない。しかし「吉田神道書」の中には神祇に関する和歌書数冊があるが、いずれも勅撰集・夫木抄等からの抄出などであって、本書とは全く異ったものである。

本書の内容は単に勅撰和歌集神祇の部、又は私撰和歌集その他の神祇の部からの抄出歌を集録したものではない。出典の明らかな歌は一四四首中二五首にすぎず、神社の謂・因縁についての文章も、日本書紀をはじめ、道真の詩文の断片、また諸神社の縁起類・説話類等によっているところが

支子文庫『神祇和哥』翻刻

福井迪子

「神祇和哥」は、現九州大学図書館蔵、故田村専一郎先生旧蔵支子文庫本の一書である。

支子文庫本の主たる典籍についての概要は、すでに「語文研究」第四十三号（昭和五十二年六月発行）誌上、『故田村専一郎先生旧蔵「支子文庫」報告』においてなされたが、本書もその中で紹介された書物の一つである。書誌についてはその報告の中にもふれられてはいるが、改めて述べておきたい。

縦二〇・〇cm×横一五・五cm。一帖。後半部を逸した零本である。室町中期の書写。列帖装。表紙・裏表紙ともに失われており、遊紙なし。墨付十七丁。内題「神祇和哥」。天地の詰った書写で、特に下端は文字すれすれまで切り詰められており、判読困難な部分もある。一面十一行ないし十二行書。詞書・左注は和歌より三字下げ、和歌は原則として一行書。諸神社ごとに、その神社にまつわる和歌を集め、簡単な謂・因縁などを付したもので、現存歌数一四四首。項目としてみられる神社名は、

伊勢（ひるめの神・月よみの宮・桜宮・風宮・朝熊宮・鏡宮）・宇佐宮

・男山・岩清水・賀茂宮・貴船・春日宮・日吉・北野・稻荷・熊野・那智・香雄・諏訪・三輪明神・葛城神・玉津嶋・出雲大社・布流社・白山・気比宮・鹿嶋の諸社。なお男山・清水・北野・那智・玉津嶋を除いては延喜式神名帖にのる諸社である。最後の「鹿嶋」の項の中途から後を逸している。

なお落丁の可能性についてふれておきたい。十三丁ウラに「諏訪神社」の記事があり、次に示す文章をもって十四丁オモテに続いていく。すなわち、

112 梓弓春いわふ日に祭して神の教は今や聞らん

正月祝日祭とて国の人集て  
的を射也其時明神あそはし

置たる自筆のきくしきあり（十三・ウ）

たち聞の間とゆふは一問作のこされたり

113 うら風も真砂のうへに吹あれて夕霧さむし住吉の松

114 これとても恋の心にあこかれて音信は聞夢の中にも